

【資料】

ロレンソ・メイエル、マヌエル・カマーチョ

「メキシコの政治学—その発展と現状—」

—「第三世界と世界政治」研究会資料(六)—

山本純一
蔵重毅 訳

この論文の目的はメキシコの政治に関する研究文献を網羅的に紹介することではない。メキシコにおける政治研究の主な傾向を現代に重点を置きながら時代順に指摘すること、代表的著作をとりあげてそれぞれの流れを例証することである。

今日までわれわれの社会生活を律してきた政治システムは総じて権威主義的性格をそなえていたといえよう。しかし、内外の政治問題についての公けの議論は常に存在してきた。

四年前、国立人類学歴史学研究所の歴史研究部政治史セミナーが十六世紀以降のメキシコの政治問題—最も広義の—

を扱った主要著作の目録を作成したが、その中に実に五、五〇〇点を採録することができたのである。⁽¹⁾パンフレット、論説、政府刊行物(報告書、記録類)、その他多少とも政治問題にふれたものまで含めるとすれば、文献の数は四倍にもなっただであろう。

容易に想像できるように、これらの文献の多くは今日「政治学」とよばれている学問の規準に合致するものではない。

事実、前世紀に欧米で生まれたこの学問分野がわが国の学界に正式に導入されたのは今世紀半ばになってからのことであ

る。それまで政治に関する体系的な——当時としては体系的な——研究は弁護士、歴史家、ジャーナリスト、あるいは単なる愛好家の手に委ねられていた。当時の研究の質を批判しているわけではなく、それが事実だったのである。

一 政治学のはじまり

先スペイン時代のメキシコにも「政治的なるもの」の考察はあったにちがいない。その時代の社会構造の複雑さからしてもそれは不可避であった。しかし、今日われわれが親しんでいる範疇とはかけ離れていたであろうし、残された資料もごくわずかである。政治分析とよびうるものがあらわれるのはスペインの征服を待たねばならない。コルテス (Hernán Cortes) の *Cartas de relación* が最初の、そして最良の例である。征服について、「征服された人々」が持っていた政治構造に関する研究が現われ始めるが、多くはスペインがこれから支配する社会をよく理解するためのものであり、支配のモデルを提供するためのものであった。そこにあらわれる「被征服者像」は、征服者達の作品であるばかりでなく、征服された人々が描いた自画像でもあった。後者には *Los*

anales de Tlatelolco (1528) やドミンゴ・チャマルパイン (Domingo Chimalpain) の著作があり、前者には Fray Bernardino de Sahagún, *Historia general de cosas de la Nueva España* (1567), Fray Bartolomé de las Casas, *Historia de las Indias* (1559), Fray Juan de Torquemada, *Monarquía indiana* (1615) がある。これらの著作は主に歴史を扱ってはいるが、当時の政治問題にも言及し、征服者にたいするさまざまな政策を代弁している。

政治問題をとりあげて著作をものにするのは植民地時代には容易なことではなかった。嚴重な検閲体制が布かれており、たとえばサアグンの著作は王命により没収されている。またイエズス会士アンドレス・カルボ (Andrés Calvo) の著書のように、この時代の重要な業績の中には十九世紀になるまで公表されなかったものもいくつかある。⁽²⁾ 植民地政治に関するこれらの文献の多くは「善政」のための目安箱の役割をはたす宗教上の著作として書かれたものである。一般に、植民地時代の政治理論家は原住民にはなく本国の関係当局にたいしてその論議を提示しようと試みた。したがってこの時代の政治文献は身分間の断絶に対応するきわめてエリート主義的なものとなった。

厳密に理論的なものに限っていえば、植民地では十六世紀以降も重要な創見が生まれたことはない。政治文献の大部分は、たとえば王権神授の正当性を論じたてたりしたのである。⁽³⁾新しい命題は生まれず、ヨーロッパで既に知られていた議論を繰りひろげたにすぎない。マキャベリにたいする攻撃の中で

副王ファン・デ・パラフォックス(Juan de Palafox)——

理論と実践の両面で政治に関心をもつ僧侶であったが——は、「神の摂理こそ支配秩序を説明し正当化するものである」と述べて、⁽⁴⁾近代政治学の創始者がかかげた神学論に異を唱えるのであった。メキシコは政治理論の分野では今も昔も先駆者であったことはない。限られた者たちがなんとか検閲の目を欺き、当時のヨーロッパの政治思想を大変革しつつあった自由主義に接することができただけである。

植民地時代の最も重要な文献でありながら公表されず、ごく一部の人たちにしか知られなかったものがある。副王が後任者に残した調書類と巡察官の報告書である。十九世紀になってやっと数点が公表されたが、そこには植民地時代の政治構造・政治過程に関する興味深い分析が含まれている。考察の対象、行為の対象としての政治は、植民地という条件の下では極度に制限された活動分野であった。政治に関する知識

の独占は本国の植民地支配を維持するために必要不可欠であった。支配原理、とくに政治過程に関する議論が少なければ少ないほど、植民地支配には好都合なのである。

二 独立期

このような障害にもかかわらず、十八世紀末から十九世紀初頭にかけてヨーロッパを震撼させた動乱はメキシコの政治研究に大きく反映した。十八世紀末に書かれた書物、たとえばフランシスコ・ハビエル・クラビエーロ(Francisco Javier Clavijero)の著作には、スペインの衰退を目のあたりに見ることによって感じとったメキシコの政治的将来にたいする不安がすでにあらわれている。クリオージョたちがメキシコの将来について描く展望——この種の著作の中心課題であった——は、スペインから離れた自立した政治構造をメキシコに育てることができかどうかにかかっていた。数年後の十九世紀初頭には、セルバンド・テレサ・デ・ミエル修道士(Fray Servando Teresa de Mier)が本国からの政治的独立計画を明らかにしている。同時に、既成権力の正当性を疑う理論を公けにしたばあいにふりかかってくる危険を身をも

って立証し⁽⁵⁾もした。

独立とともにメキシコはかつてない動乱の時代に入り、新しく生まれた国家は分裂守前にまで追いこまれた。一方では外国からの脅しや侵略があり、他方では国家財政の破綻と自由派・保守派に分れたクリオージョ・エリート間の果てしない抗争——連邦制から中央集権制か、国家と教会の関係は、など——がある。更に、政治の舞台に新しくのぼった者、天下晴れて自らの存在を主張できるようになったメステイソンがいる。この錯綜した状況にあって、研究者であれ活動家であれ、多くのものがメキシコに将来性ある確固とした政治システムが生まれる可能性を疑うようになった。アメリカ合州国あるいはヨーロッパの手によって結局は国家が消滅してしまふのではないかとおそれたのである。しかし政治闘争の渦は多様な政治文献を生みだすまたとない触媒でもあった。小さな党派のものも含めて世界のあらゆる思想がメキシコで声をあげた。そして、さまざまな政治思想がぶつかりあう中で有能な人材は自由派・保守派の間にはば均等に分かれていたのである。

イデオロギー上の闘いに好んで用いられたのは政治史であった。自由主義的メキシコ、保守主義的メキシコというそれ

ぞれの主張を「自然」あるいは「歴史的必然」という概念から正当化しようと試みたのである。ここで注目すべきなのは、切迫した状況にあったにもかかわらず何点かの著作は諸外国で生まれたものに比べても決して質的に劣らないことである。

ルーカス・アラマン(Lucas Alamán, 1792-1853)は保守派の思想と行動を代表する人物であろう。裕福な家庭に生まれたが、メキシコの独立とともに一族は没落した。教養ある旅行家、精力的な読書家、積極的な企業家であり、ブスタマンテ、サンタ・アナ両政権の閣僚でもあった彼は、メキシコの歴史と政治に関する書物を公表し、リベラルな経済体制をとまなう君主政がメキシコの統治形態としては最もふさわしいと主張した。⁽⁶⁾独立が必要であったことは認めるが、実際に達成された形での独立が必要であったと認めたわけではない。彼の目には、メキシコの独立は文明の規範と価値の伝達者・受託者である資産階級にたいする無責任なプロレタリアートの蜂起だと写ったのである。文明の価値と規範を欠いて、メキシコは進むべき道を失いつつある。インディヘナの遺産は評価できる。だがスペインによる植民地化のプラスの面を否定すること、また、メキシコという国家のもつ君主主義的・

権威主義的本質とは全く相容れず特権クリオージヨ階級の利益にも反する自由主義を極端に押しすすめようとしてこの國が受継いできた政治的伝素を破壊することは、無益であり、有害である。メキシコは変らなければならない。しかし、変革はゆっくりと注意深く、過去の経験から権力行使のすべをよく知った者の監視の下で進めらねばならない。過去の制度はいまだよく機能しているのだから、それを保持しなければならぬ、彼はそう考えた。

自由主義派にはロレンソ・デ・サバラ (Lorenzo de Zavala)、『ホセ・マリア・ルイス・モラ (José María Luis Mora)』、『リアノ・オテロ (Mariano Otero)』、『ギエルモ・ブリエト (Guillermo Prieto)』、『イグナシオ・バヤルタ (Ignacio Vallarta)』などの錚々たるメンバーがいた。⁽⁷⁾

謹厳な神学博士であり、政治理論家、実践家でもあったモラの著作は自由主義者による分析の好例である。彼が生きた時代のメキシコは政治的不安定が常態であり、唯一の力は武力であった。モラは進歩思想を前提にし、そこから既存の社会構造を否定して選択の幅を広げようとした。もつとも、党派間の暴力が日増しに激しくなる祖国の状況にやがて失望するに至るのだが。典型的な自由主義者であった彼は、当時大

ロレンソ・メイエル、マヌエル・カマーチョ「メキシコの政治学—その発展と現状—」

(三六三) 一三五

きな影響をもつた思想家、たとえばベンサム、モンテスキュー、フランクリンらの書物に親しんでいた。絶対自由主義を支持しするが、自由と秩序の二者択一を迫まられれば秩序を選んだ。もつとも、軍事力による秩序を望んだわけではない。軍人支配には生涯一貫して批判的であった。社会的不平等——土地の集中——の現実にてらして、土地再分配に同意する。但し、再分配は市場メカニズムを通して行わねばならない。結局、保守主義者と同様にモラは資産階級の特権を擁護したことになる。彼には社会主義は忌むべき政治計画と思えたのである。また、個人主義者でありクリオージヨであったことから、インディヘナ大衆にたいする保守派の不信感を共有してもいる。教会勢力については、おそらく神学校で教育を受けた反動であろうが、教会が政治的役割をはたしていることを強く批判し、軍隊とならんで教会が古くから持っている特権、とくに経済的特権を廃止することが必要だと主張した。教会と軍隊こそ進歩主義的計画にたいする二大敵対勢力だったのである。全ての自由主義者に共通する特徴であるが、彼もまたメキシコに適した政治体制は中央集権制ではなく連邦制であるとの考えを堅持し、保守派がアメリカ合州国にたいしてもつ大きな不信感を少くとも一八四八年までは

抱いていない。同時代のほかの理論家と同じように、自らの思想を支える基盤として歴史を用いた。資料不足は論証に至るための障害には決してならなかった。モラに限らず彼の同時代人の特徴は、科学的厳密性に過度に気をとられなかったことである⁽⁸⁾。

アラマンとモラは、十九世紀を通じて政治の世界で覇権を争った二つの理論的潮流——受け継いだ権威主義的構造のゆるやかな変革を正当化しようとした保守派の計画と、当時の支配的地位を否定し、民明的で近代的な共和国を建設しようとした自由派の計画——を代表する人物ととらえることができる。

一八七七年ボルフィリオ・ディアス政権の樹立とともに、三〇年にわたる「バックス・ボルフィリアーナ」の時代が始まった。しかし、経済的変化が政治論議の性格に大きな影響を与えたわけではない。依然として政治論議の主戦場は歴史であった。ディアス政権の教育相フスト・シエラ(Justo Sierra)が著わした *La evolución política del pueblo mexicano* (1900-1902) は、メキシコの政治問題にたいするこのような接近方法の頂点を示す好例である。シエラは先スペイン時代の文明からボルフィリオ体制にいたるまでのメキシコの変遷

を概観し、長いこの過程を野蛮にたいする自由の勝利ととらえた。自由主義的樂觀主義者の立場からディアスの事業を見ており、物質的發展は結果として進歩を担うブルジョアジーの形成をもたらしたとする。そのためには政治的發展を一時的に中斷しなければならなかったが、そうすることによってのみ社会的發展を促進することが可能であった。ディアスによって確立された「社会的独裁」が自由主義的計画の最終形態ではない。ただ、この物的条件によってこそ新たな政治的發展を一層強固な基盤に立って進めることが可能になったのである。シエラはそう考える。この過程で切望された自由は、物質的進歩がインディヘナ大衆の生活形態を転換させる時になれば獲得されるであろう。基礎はすでに確立された。したがってその転換は時間の問題である。

シエラの樂觀主義に全ての人が共感を覚えたわけではなからうが、政治論議に歴史的ー貫性を与える方法はここでもきちんと守られている。

革命前夜⁽⁹⁾ フランシスコ・I・マデロ(Francisco I. Madero) がディアス政権を糾弾するが、彼もまた過去にさかのぼることによってディアス政権が自由主義的計画を裏切っているとしたのである。この時期の著作の多くは「政治よ

りも行政に”というスローガンにみあったものであり、すでに政治闘争の手段ではなかった。しかしディアス政権も末期になり脆弱性が明らかになるにしたがって、この闘争手段は大いばりでよみがえった。ケリード・モエノ (Querido Moheno) やフランシスコ・P・センチエス (Francisco P. Senties) の著作がそうであり、とくに反体制ジャーナリズムがそうであった。⁽¹⁰⁾

十九世紀半ば以来の方法論が頑固に生き残ってはいたが、流れがvarietyあることも確かであった。アンドレス・モリナ・エンリケス (Andrés Molina Enriquez) はその著書 *Los grandes problemas nacionales* (1909)——フスト・シエラのアンチ・テーゼ——の中で、従来の歴史学的方法はもとより、生物学、法学、経済学を駆使して三世紀にわたる経済的發展にもかかわらずなぜ貧困が遍在しているのかを説明しようとした。歴史学の基盤の上に土地分配、信用供与、灌漑、人口分布の分析を重ね合わせることによって政治状況をよく説明しえたのである。その方法論と社会階層矛盾の強調とによってモリナ・エンリケスは、基本的には自由主義者であったが、後に社会主義者が行なう種類の分析とそれほどちがわないものをすでに発表している。メスティーン——中間

階級——の側に立って論陣を張り、国民の中核になるべき彼らがその役割をはたそうとする時にぶつかる構造的障害を論難した彼は、シエラが提示したものよりも一層克服困難な状況を描いてみせた。一年後、革命はまさにモリナ・エンリケスの分析の正しさを証明することになる。

ポルフィリアート末期の政治状況の下で、リカルド・フロレス・マゴン (Ricardo Flores Magón) の著作によってメキシコの政治的現実新しい光をあてられることになった。社会主義者の分析があらわれたのである。彼らは土地所有制が変らぬ限りメキシコの政治的社会的發展にたいする障害は克服できないと主張した。⁽¹¹⁾

三 一九一〇年革命

容易に想像できるように、革命は政治分析の形式と内容を急激に変えた。革命時には博く知識を修める時間はないし、深い思索、綿密な調査、慎重な表現とならざるに困難である。その上、革命闘争は厳密には知識層が行なったものではなかった(知識層、そして彼らがたずさえていた理論的武器は一九一四年半ばにして戦線を離脱し、その後かなりの期

間姿を現わさない)。したがって新しい表現方法が必要とされたのである。伝統的方法を受継いだ者は十九世紀流の論議を続けていた。例えばフランシスコ・ブルネス (Francisco Buñes) 、「トリビオ・エスキバル・オブレゴン」(Toribio Esquivel Obregón) 、「ホルク・ベラ・エスタニョール (Jorge Vera Estanol) がそうである。⁽¹²⁾しかし彼らの影響はごく限られていた。歴史に打ち負かされた彼らは、勝者が弾劾し破壊した統治システムの中であつて自らがはたした役割を過ぎる限り正当化しようと努めたに過ぎない。

新しくあらわれた分析形式の典型はエッセーと各党派の機関誌であつた。戦闘の記録が出まわり、内戦における勝者と敗者の回想録もすぐに出版されはじめた。著者自身の「革命的性格」を強調し、敵対する者の「革命からの逸脱」を論難するのが、これらの出版物に共通する特徴である。二〇世紀のほかの革命ほど明確なプロジェクトをもたなかつたメキシコ革命のばあい、さまざまな態度が「革命的」として正当化された。彼らの現実描写はしばしば事実に対するが、歴史の証言としては非常に有益である。中にはホセ・バスコンセロス (José Vasconcelos) の著作のように文学作品として見落せないものもあるが、なんととっても彼らによる事実の歪曲

は途方もない量に達する。⁽¹³⁾

したがって、革命という劇的な時期のメキシコ社会に関する最も重要な研究は、実際には、「社会的実験室」と化したメキシコに大きな関心を抱いた外国人、とくに北アメリカ人の手によるものであつた。外国人によるメキシコ研究は目新しいことではなく、例えばアレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt) の *Ensayo político sobre el reino de la Nueva España* (1811) を思いおこすだけで充分であろう。まず最初に、内部闘争とは無関係であつた外国人研究者が革命期間中、あるいは革命直後に、学問上欠かすことのできない方法を政治分析に再適用したのである。たとえば、革命の激動が終ろうとする時期にメキシコを訪れたコロンビア大学のフランク・タネンbaum (Frank Tannenbaum) は、「入手できた資料を使うこととはもとより、各地をまわつて社会変動の過程(これにたいし彼は明らかに共感を覚えていた)を直接観察し、政治決定の上層に接近した。その成果が *The Mexican agrarian revolution* (1929), *Peace by revolution* (1933) である。この二つの分析は、革命によつてはじめられたメキシコ社会の構造変革、とくに農地改革の論理と正当性を支持するものであつた。そ

の延長線上に、マーシヨリー・ルス・クラーク (Marjorie Ruth Clark) が *Organized Labor in Mexico* (1934) の中で、またファイラー・シン普森 (Eylar Simpson) が *The Ejido: Mexico's way out* (1937) で展開した議論がある。現在でもこれらの著作は当時のメキシコ社会を研究する際の必読文献である。

この時期にあらわれたとくに重要な研究としてアーネスト・グルーニング (Ernest Gruening) の *Mexico and its heritage* (1928) をあげることができるが、これは単に同書が革命が一つの方向に向ってかたまりつつあった時期の政治システムを詳細に描きだしたためばかりではない。カーエス政権が政治問題に関する「生の公文書」の閲覧許可をグルーニングに与えたという事実のためでもある。このいきなひは「革命一家」の内部闘争の複雑さを示している。また、グルーニングに与えた閲覧許可は、新体制が合州国にたいして行なった支持獲得、自己防衛の試みでもあった。合州国のリベラル派学者による分析は——メキシコ革命に全く好意的でない僅かな研究とともに——把握することがむずかしい現実を理解するためのめやすとなっただけではない。そのうちのいくつかは、揺籃期のメキシコ革命にたいし鉄槌を下すようワシ

ントンに要求していた北アメリカ企業グループの圧力を中和させる働きをしたのである。⁽¹⁴⁾

四 第二次大戦とその結果

北アメリカ人によるメキシコ研究は増加の一途をたどった。月日がたつてメキシコ革命が新奇さを失った時に、研究の総決算が始まったのである。第二次大戦が終るころすでに北アメリカには大学や類似の研究機関で働く一群の「メヒカノロゴ」がいた。そこから生まれた研究の大部分は、革命後の政治システムに肯定的評価——あるものは過大な評価——を与えていた。最も重要な研究として Tannenbaum, Mexico: the struggle for peace and bread (1950), Howard F. Cline, The United States and Mexico (1953), Robert C. Scott, Mexican government in transition (1959) があつた。六〇年代に入るとクラインは *Mexico, revolution to evolution, 1940-1960* (1963) を著し、同じ年にウィリアム・グレイド (William glade) とチャールズ・W・アンダーソン (Charles W. Anderson) が *The political economy of Mexico* を、レイモンズ・バーノン (Raymond Vernon) が *The dilemma*

of Mexico's development を、翌年にはフランク・ブランデンバーク (Frank Brandenburg) が、The making of modern Mexico を出した。この頃は冷戦の最中であつたし、やがてキューバ革命の影響拡大にたいする不安も一般化する。メキシコの政治システムはキューバ・モデルにかわる選択肢として北アメリカ人の関心をひいたのである。彼らの研究から、この時期の北アメリカ人「学者」の通説的見解が明らかになる。すなわち、メキシコ革命によつてもたらされた変化は、当初の生みの苦しみをぬけでて経済発展と「社会正義」に通じる扉を開いた。メキシコには不完全ながらも自由の進展がみられるのだから、「代表民主制」への扉も開かれている。スコットの著書の題名が示すように、メキシコの政治システムはいまだ完成されたものでないにせよ、権威主義を克服し民主主義に向う歩みをすでに踏み出している、と彼らは考えたのである。北アメリカ人による膨大な量の研究の背後には、革命運動がひき起した構造的変化——農地改革、社会保障制度、石油国有化など——によつて国の「経済的離陸」が可能になったという仮説に依拠する構造機能主義の立場がある。一九四〇年からはじめられた開発戦略、とくにミゲル・アレマン大統領の政策は逸脱や限界はあつたものの適切であ

つたとされた。この発展過程がメキシコ社会の多様化を促進しているとも主張された。すなわち、メキシコ社会には真の民主的多元主義を実現するのに適した政治的意見の伝達回路がすでに基本的には備わっている。支配政党である制度的革命党 (PRI) は、社会の変化を吸収しつつ権威主義的悪幣を放逐する能力をもつ。メキシコはキューバが国民に約束した物質的發展を、キューバが与えることができないでいる自由とともに達成するであろう。このような北アメリカ人の樂觀主義は現在では支配的でないが、当時はメキシコの「エスタブリッシュメント」によつて大歓迎された。PRIの幹部は、ほとんど彼らの同調者と化したアメリカの政治学者にたいていいつでも情報を提供する用意があつたのである。

ハーバードの経済学者バーノンは経済分析に政治的要因を加えた著書の中で、弱々しいが次のような警告を発した。メキシコでは輸入代替に依拠する容易な工業化段階が過ぎさうとしているため、数年後には社会的緊張の生まれる可能性がある。メキシコの政治経済モデルは、市場の力を一層自由に機能させて新興産業ブルジョアジーにそれにあつた役割を認めるか、「混合経済」に占める政府部門の比重を一層高めて国家が経済活動の眞の統轄者の役割を一挙に担うか、こ

の二つのどちらかでなければならぬ。そしてバーノンには前者の方が将来性ある戦略だと思われた。しかし、「安定持続成長」路線によって、公的部門に手をつけなくても民間資本には自由に活動できる場が充分に残されていたため、責任ある立場の政治家が彼の予言をまじめにとりあげることはなかった。

いずれにせよ五〇年代から六〇年代初めにかけてメキシコの政治システムに関する通説的見解を供給したのは北アメリカの政治学者、経済学者、歴史学者であった。分析方法は非常にアカデミックであり、彼らのイデオロギーは「科学的中立性」の装いによって覆われていた。彼らの図式にしたがえば、メキシコは進歩と民主主義の道を邁進していたのである。ブラボー川の向う岸にある強大な国との関係は時とともに一層改善されるであろう。かつての「石油」のようなメキシコ社会に打ち込まれたくさびは取り払われたのであるから、経済的相互依存関係が互いに尊重し合う精神のうえに築かれるであろう。ボリビア革命が失敗だったとしても、メキシコ革命はちがう。メキシコ革命の「成功」——年平均六％のGNP成長率、そして民政——の中にこそ、「進歩のための同盟」となってあらわれた北米のラテン・アメリカ政策が探し求め

るモデルがあったのである。

五 メキシコ国立自治大学政治社会学部の創設と研究方法の変化

すでにふれたように、メキシコでは今世紀半ばまで政治問題を学問的にとりあげたのはほとんどが法律家や歴史家であり、例外は僅かであった。メキシコ国立自治大学には一九三九年に社会学研究所がつくられていたが、遅ればせながら欧米の大学やラテン・アメリカの一部の大学にならって、一九五一年に政治社会学部(ECP S)が創設された。ECP Sの初期の活動は、政治学、社会学、新聞学、外交関係の四つの専攻分野の教育に重点を置くものであった。活動開始に際しては当然のことながら伝統的に政治問題にとりくんできた歴史学者、法律学者を教授に迎えなければならなかった(そのうちの数名はエル・コレヒオ・デ・メヒコの社会科学セミナーの出身者であった)。このころの学生は、たとえば合州国のばあいと異なり、新しい知識を学界に蓄積しようとしたのではなく、大部分の学生の出身先であり戻る先でもある官公庁で学んだ知識を生かそうとした。ECP Sは初期の

段階では幹部養成学校の役割をはたしたのである。

しかしいづれにせよ政治研究を質的に変化させる基礎ができたのであり、その結果が序々にあらわれることになる。E C P S 初期の研究成果は一九五五年に創刊された *Revista Mexicana de Ciencias Políticas* に発表されはじめた（社会学研究所の研究誌 *Revista Mexicana de Sociología* は一九三九年以来刊行されており、ここにも政治学関係の論文が掲載されていた）。現在までこの雑誌には五五〇点の論文が掲載され、大部分はメキシコ人学者のものである。これらの論文のうち半数以上が社会学関係のもので、基本的に政治問題を扱ったものはそれよりも少ない。初期の論文の大半が「伝統的」なテーマをとりあげていたのに対し、五〇年代末には専門化が進んだ。また、政治学の冬期講習では著名な社会学者に直接接する機会が学生や教授に与えられた。

六〇年代になると、理論研究ではマルクス主義の方法が主流を占めるようになり、メキシコを対象としたものでは、社会階級、社会経済構造、国家と政治システムの特徴などに關する論文が支配的であるように思われる。

一九五八年、パブロ・ゴンサレス・カサノバ (Pablo González Casanova) が E C P S 学部長に就任し、それまでのカ

リキュラムが改訂された。中心科目であった歴史・法律関係の教科は補助的なものにかわり、課程の大半を直接専攻分野に結びつける努力がはらわれた。また、五番目の専攻分野として行政学科が新設された。ゴンサレス・カサノバの登場は純粹にアカデミックな——したがって政治学、社会学の世界的趨勢に対応しうる——新しいタイプの社会学者の出現を意味した。専門理論と経済的データにたいする関心が高まった。学生の構成も変化した。年令が低くなり、非勤労学生が増加した。卒業生のなかから大学院への進学を希望するものが出た。もっとも、卒業生の数はそれほど多くなく、一九六七年までに三五名が政治学士号・行政学士号を取得したにすぎない⁽¹⁵⁾。多くの学生は従来どおり特に政府機関での実践のために政治学を学んだが、それでも少数であるが学問の世界に入ってメキシコの権力機構の研究に携わる者もでてきた。そして一九六七年に高等研究科が創設され、大学院課程がスタートしたのである。

一九六六年ゴンサレス・カサノバは政治社会学学部長を退任し、伝統ある社会学研究所の所長に就任した。その前年に彼の著作 *La democracia en México* が出版されている。この書物は今では革命後のメキシコの政治・社会を扱った研究

の流れの中で分水嶺にあたるものとみなされており、現代メキシコの政治システムをメキシコ人自身の視点から分析した一大総合研究である。また、多数の文献、とくに豊富な統計資料に裏打ちされたこの研究は、当時わが国の社会科学界に一般的であった問題意識を、そしてその方法論の両義性を反映してもいた。すなわち、構造機能主義とマルクス主義の双方を採用して政治の現実、社会の現実の变革をうったえたのである。

ゴンサレス・カサノバの問題意識は明らかである。六〇年代半ばのメキシコでは——とくに政府筋では——低開発から抜け出す確かな道をすでに見出したとする自己満足的な考え方がゆきわたっていた。とにかく国民一人当り生産高の伸び率はラテン・アメリカ諸国の平均を上回っていたし、政治的安定も南の近隣諸国に比べればきわだっていた。そこから“メキシコの奇跡”が鳴り物入りで喧伝されたわけである。しかし危跡の実体は何か、ゴンサレス・カサノバは可能な限りの客観的分析とメキシコ革命の精神を明確化することによってこの問題にせまろうとした。ある意味ではモリナ・エンリケス流の“わが国がかかえた重大問題”というテーマに戻ったといえよう。すなわち、経済成長があったことは否定で

きない、しかしそれはどの程度に真の社会的政治的發展を伴っていたのか。

ゴンサレス・カサノバは法規定上の権力構造の分析からはじめるが、直ちに、地方ボス、企業界、北アメリカの行動といった実際の権力要素の考察に移る。次にこの政治権力を、それを支える社会構造と結びつける。そして、政治権力の性格を、また政治権力と社会構造の双方のなりたちを説明する変数として、周辺化・国内植民地主義なる概念を導入する。

したがって、国民の広範な部分が体制に同調していないのは理の当然ということになる。しかも彼らの非同調を表明する手段こそメキシコには欠けているものなのである。そこにメキシコ民主主義の亀裂を彼は見た。政治的障害はすぐに経済的困難に転化しよう。あれほど夢中になって追い求めてきた経済成長でさえ、所得分配の改善なくしては継続不可能である。所得分配を改善するためには、国民の多数者に今日まで持ちえなかつた政治権力を与えなければならない。ゴンサレス・カサノバはそう警告する。他に道はない。高い経済成長を望むならこの悪循環を断ち切らねばならぬ。国内植民地主義と対外従属を続ける限り低開発を克服することは不可能である。彼はこの命題を確立するために、自分の立場はマルク

ス主義の見解からも構造機能主義の見解からも妥当であることを示そうとした。メキシコ革命によって生まれたシステムを順調に育てあげるには根本的変革が必要であり、その変革は、一言でいえば、形だけの民主主義に実質を与えることである。

こうして、北アメリカ人による楽観主義的分析に歯止めがかけられた。メキシコ革命が一つのモデルであり続けるためには彼らが予想した以上の障害をのりこえなければならぬし、障害はほうっておいて自動的に克服されるものでは決してない。政治的・社会的慣性はメキシコでは民主主義確立の方向を指していなかったのである。

しかし北アメリカ学界の論調は変わらず、メキシコでの影響力もさして衰えなかった。一九六六年ビンセント・パジェット (Vincent Padgett) が *The Mexican political system* を出したが、これは機能主義学派の最先端をゆく研究だといわれたものである。ブエブラやトラスカラでのフィールド・ワークと文献利用を組み合わせ、政治システムの理解のためのみごとに整理された枠組を提出した。中心テーマは国家、社会化の過程、政治組織(政党、階級組織)の間の関係である。政党、労働組合、経営者団体の実際の機能——利益の集

約、要求の伝達など——が具体例で示されるとともに、総合的解釈が加えられている。結論はいとも単純で、システムはうまく機能しており国の近代化は進展しているというものであった。ゴンサレス・カサノバが指摘した「機能障害」は卷末においやられ、全く表面的にしか考察されなかった。同じ年に経済学者ロバート・L・シェンファー (Robert L. Shafer) が *Mexico, mutual adjustment planning* を出した。

ここではそれまで分析されなかった官僚間の闘争や希少資源の合理的利用に関する公共部門と民間部門の対立といった「機能障害」がとりあげられている。一九六七年、六八年には北アメリカ人による伝統的な政治分析の最後の二冊、ジェームズ・ウィルキー (James Wilkie) の *The Mexican revolution: federal expenditure and social change* とチャールズ・カンバーランド (Charles Cumberland) の *Mexico, the struggle for modernity* が出版された。ウィルキーは国の予算をとりあげ、それを各時期にわたり比較検討するという新しい方法を打出し、カンバーランドは歴史学の伝統的手法を採用した。両者とも、メキシコ革命は本来の責務である公正で発展性のある社会の建設という目標を大体において達成したと結論している。

六一九六八年危機

近代化論者が主流を占める中で、メキシコの政治システムが成立当初から抱えこんできたさまざまな紛争は、黙殺されるか体制を大きく揺がすものではないと考えられてきた。しかし、体制と労働者階級との間には、たとえば一九四八年、五八年に深刻な対立があったし、農民紛争は現体制がはじまって以来休みなく続いていたのである。更に、六六年の医者らのストライキにみられるように、体制と中間階級との対立もすではじまっていた。これらはもはやキューバ革命の影響といった外部要因とは関係のないことである。

大規模な学生運動、それに伴う都市住民の動員、政府の否定的対応、一九六八年に起った一連の事態は歴史そのものを変えなかったとしても、歴史を見る者の態度を変えたことは確かである。少なくとも、体制側、反体制側をとわず彼らの理論と実践に大きな影響を与える一種の覚醒があったことは否定できない。その時に生じた急進化の結果、ある者は一九六八年を一九〇五年の世界革命と重ね合わせ、「一九一七年」に達するまでの十二年間に期待をこめた。状況をそのように

把えしかも革命的信念に燃えるものが、国家とのさし迫った対決に備えて理論的関心を決定的に放棄するに至ったのも当然であるといえよう。

しかし、学問上の修練を積んだ者あるいはこれから積もうとする者の多くは、互いに関心を異にしれば敵対する政治的立場に立ちながらも、ともかくわが国社会の複雑な現実の中で研究を継続しようと決意した。体制は柔軟性を示してこの決意を迎え入れ、高等教育にたいする大幅な予算増加、大学院教育にたいする財政援助となった。同様に、意見を表明し、雄誌を発行し、書物をひろめる機会も増したのである。

一九六八年に体制の正当性が失墜したことにより、支配層内部にさえ従来の開発主義はメキシコを低開発から救い出せないまま破産してしまったことを認める者が出てきた。ここに至って新たな問いかけがはじまり、やがて尖鋭化する。続々と発せられた問いは次のようであった。「現体制はどのようにして形成され、なにゆえにかくも長きにわたって存続しえたのか」、「体制を支えた基盤、コンセンサスは何であったのか」、「いかなるタイプの政治文化がわが国において支配的であったのか」、「政治システムと社会勢力・社会階級との間にはどのような関係があったのか」、「体制と国民経済の間、

また体制と帝国主義経済との間にどのような関係があったのか”、“それぞれの社会勢力・政治組織は何を望んでいたのか”、“誰が支配集団を形成していたのか”、“支配集団変革の可能性はあったのか、あったとすればいかなる方向へか”。“これらの問いかけは政治問題に関する著作を加速度的に増加させた。

もちろんこれらの問いの多くはメキシコの歴史を通じていかなる体制の下でもくり返し提起されえたものであろう。いかなるメキシコ人研究者が何らかの形でそれを実際に提起したことも疑いない。しかし、各時代に発せられた問いとそれへの回答が似たものであったり同じものであったとしても、問いを発したことの結果は一九六八年——“安定持続成長”の危機——を境にしてちがった意味をもったのである。

政治学にかかわりをもつ者の全てが“六八年”に触発されて問題意識を獲得したというわけではない。ゴンサレス・カサノバの研究のように、理論的水準においても主張の内容においても“六八年以降”の先駆となるものがあったことは前述したとおりである。また、以前から国立自治大学には国家論に関する二つのセミナーがあった。担当した有名教授が大きな影響力をもっていたため、このセミナーは政治的考察を

生む場としても重要であったし、メキシコの政治にたいして直接のインパクトを与えもした。たとえば、マリオ・デ・ラ・クエバ (Mario de la Cueva) の教室からは幾世代にもわたって官僚、政治家が輩出した。マヌエル・ペドロソ (Manuel Pedrosó) も有能な若者を育てあげた。官僚の中にはこのセミナーの活動と出版物を通して政治学に出会った者たち、今も政治学に直接のつながりを持つ者たちが多くいるのである。⁽¹⁶⁾

政治問題の体系的研究には全ゆる分野の学問が動員された。経済学からはダニエル・コシオ・ビエガス (Daniel Cosío Villegas) が政治学に接近した。コシオの著作は、世論、とくに彼が良き代弁者であった中間階級の世論形成に大きな影響を与えた。六八年危機の際にはいくつもの論説を発表し、当時の深刻な政治問題を小規模ではあっても自由に討議する場を作りだすのに決定的に貢献した。そのため彼の著書 *El estilo personal de gobernar* (1972) は異常な売行きをみせたのである。また *El sistema político mexicano* (1972) は政治学専攻の学生がくりかえし引用した著作であった。もっとも、実際には一九四八年に“Crisis de México”他の評論を書いた時点で政治評論家としては頂点に達していた。

総合的・体系的であるとともに、時代を直視し将来を予測する、したがって当然挑戦的でもあるという彼の評論の到達点は、この時期に書かれたものの中にすでにあった。

政治分析にオクタビオ・パス (Octavio Paz) のように詩の世界から近づく者もいた。もっとも彼のばあいは哲学、人類学、歴史学を駆使している。そうすることによって、El laberinto de la soledad (1950) にみられるように幾世代ものメキシコ人を感動させたあのまれにみる独創的な思想と言語の体系に到達・回帰しようとしたのであった。その後の政治分析には、メキシコの政治システムの発展性に疑問を投げた Posdata (1970) や、彼が創刊した雑誌 Vuelta (旧名 Plural) に掲載した論文がある。これらの論文は時として批判を浴びましたが、メキシコの知識人の議論から忘れさられることは決してなかった。

作家のカルロス・フエンテス (Carlos Fuentes) も政治評論家として有名であった法学部時代から政治分析に進出している。Paris, la revolución de mayo (1968) はこれまでにない形の啓蒙書で、メキシコ人の政治的関心を高めた。

Tiempo mexicano (1971) も独特の視点からメキシコ史を再検討したもののだが、その批判的分析はエチチェリア政権を

正当化することで終わっている。

このように政治的現実の由来と意味を探索しようとする者の出身は千差万別であり、各人の発する問いはきわめて個性적이다。したがって、学問研究を続けている者より往々にして感覚の鋭いジャーナリストや弁護士、政治活動家、作家にたいして政治学という一つの学問の規範を強制することは余計な口出しとなるらう。

七 諸学派——政治学の現状

(a) “行動主義”と構造主義

〔行動主義〕 第一の潮流はいわゆる行動主義学派である。これまでメキシコにおける行動主義学派の影響力は大きくなかった。それは定量的手法が大してひろがっていないにもよるが、またイデオロギー的偏見にもよる。

北アメリカの研究者は近年行動科学的手法を使って研究を進め、メキシコ人の態度やコミュニケーション、政治文化について理解を深めたにちがいない。Politics and migrant poor in Mexico City (1975) を書じたウエイン・A・コー

ネリアス (Wayne A. Cornelius) のように実際に学問的貢献をした者も何人かはある。しかし彼らはむしろ例外的なケースである。

特定の問題を研究するにあたってあらゆる分析技術を用い、同時に理論的厳密さを保つ、このことがいかに重要であるかをコーネリアスの研究は北アメリカ人「学者」に再認識させた。彼は、あらゆる文献をしらべ、アンケート状を作成し、アンケート調査を実施する助手を雇い、指標を作成し、そして調査結果を理論とつぎ合わせ似た事例を比較した。そのため、一つの問題を扱ったにすぎない彼の経験的研究は他の分野の専門家にとっても興味深いものであり、彼の結論はちがった政治的立場にある者にも魅力的なのである。

これにたいしエブリン・P・ステイブンス (Evelyn P. Stevens) の *Protest and response in Mexico* (1974) は、鉄道労働者、医者、学生の運動をしらべることによって紛争時における体制と社会との関係を把握しようとしたが、結局、政治的コミュニケーションに関する小さな研究にしかならなかった。日刊紙 *Excelsior* の記事を主な典拠にしたり、著者の聞きとりに応じてくれた人々の回答に、どの層を代表するかどうかの誰をどのように選びだし何を質問したのか明らかにし

ないまま、依拠することによってこれらの運動に新しい解釈を加えようというのは無理な話である。貧弱な理論的枠組の中で各ケースについて皮相な分析を行なっただけでは、体制と社会の関係にたいする理解が深まるわけでもない。一片の新聞記事——空港で盲導犬を見失った盲目のイギリス人の話——からメキシコ人の価値選好についての結論、つまりわれわれメキシコ人は身体障害者にたいして関心を抱いていないが動物には関心をもっているとか、外国人にたいして無関心であり、個人の持物に敬意を払わないといった結論を導き出すような著作は、完成された研究とはとてもいえない。

北アメリカ人の著書や論文で、ろくに調査研究をしないまま北アメリカの文化的情況・反情況に大きく囚われた結論を出す例は枚挙にいとまがない。主題を理論的に練りあげることとをしないで何回かの非公式インタビューや僅かなアンケート調査から一般的な結論を引きだして書きあげる例も多い。文中にあげた人物や機関の名前、事件の日付のチェックすらしていないこともしばしばある。メキシコ研究における北アメリカ人の貢献にケチをつけるわけではない。ただ、研究の成果はそれ自体の価値によって判断されるべきであり、彼らが享受している学問的基盤の広さや出版の容易さによって判

断されるべきではない。彼らがメキシコ研究に貢献してきたことは認めなければならないが、メキシコについての専門知識を充分持っていると勝手に決めこんで「うろんな商売」をしているばあいも多いのである。これは筆者の独断ではない。彼らいうところの「無知蒙昧な」メキシコ人社会学者が一般に下している評価である。

メキシコにおける行動主義学派を代表するのはラファエル・セゴビア (Rafael Segovia) である。彼の著作 *Politicización del niño mexicano* (1975) はあの「六八年」の翌年に三、五〇人以上の児童を対象に行なった調査をまとめたものである。メキシコにおける政治的社会化が体制維持に決定的に寄与してきたことをセゴビアは明らかにした。

「六八年」は子供の政治意識にたいして大きな影響を与えなかった、いいかえれば親や教師にもそれほど影響を与えなかったわけである。子供の生活の中で、また社会的統合を進めるといふ点でも学校は序々に比重を高めているが、まさにそのことによって学校は単に技術や文化を修める場であるばかりか、社会生活の中ですすみます重要な政治的役割を担う機関になってきている。セゴビアが調査対象の中に見出した類型は国民の広範な階層に存在する巨大な潜在的保守主義の反

映であった。この著作によって彼は行動主義と構造主義に立つ経験的研究を大いに発展させた。また、ホセ・ルイス・レイナ (José Luis Reyna) は一九六七年の論文「Desarrollo económico, distribución del poder y participación política: el caso de México」と後の博士論文(一九七二)で政治的動員と経済発展のレベルとの相關関係の実証に最初の貢献をしている。カルロス・サリナス (Carlos Salinas) の「Gasto público y participación política de los campesinos」(Cambridge, 1978) 他の個別研究はこの問題に関する仮説のいくつかを再検討したものである。

〔構造主義〕 政治構造(制度と過程)の研究は *La democracia en México* で採用された構造機能分析によって大きく進歩した。その後数年間の空白があったが、やがて続々とケース・スタディが発表され今日に至っている。中には理論的に限界があるものも含まれているが、全体として体制を理解するのに多大の貢献をしている。特に注目を集めたものに *Foro Internacional y Vuelta* に掲載された選挙過程に関するラフマエル・セゴビアの論文がある。⁽¹⁷⁾ フェルナンド・ハルス・コリア (Fernando Pérez Correa) の「La revolución mexicana, clases sociales y proyectos políticos」(1971)

は、地域社会から国民社会への転換を扱った研究であり、広範な社会現象にたいしていかに包括的な解釈を与えるかという点で構造主義学派がはたした貢献の一例であらう。マヌエル・カマイーチュ(Manuel Camacho)は『Los nudos históricos del sistema político mexicano』(1977)で、レン・ラ・グルーブによって革命が統合された後に生まれた現体制がいかなる道を選択すべきかを提示した。ロレンソ・メイネル(Lorenzo Meyer)は『La etapa formativa del Estado mexicano contemporáneo, 1918-1940』(1977)で、現在まで続く体制の諸構造が生まれ出た経緯を分析している。ホセ・ルイヌ・レーナの『Control político, estabilidad y desarrollo en México (1974)』もこの学派に含まれるべきであらう。現在エル・コンピオ・デ・メヒコが刊行中の『Historia de la Revolución Mexicana』のうちの数巻も若干の留保⁽¹⁸⁾をきくやはり構造主義学派の研究に含めることができよう。アントニオ・デルモアー(Antonio Delhumeau)編『México: realidad política de sus partidos』とホルヘ・キンターニョ(Jorge Montañó)の『Los pobres de la ciudad de los asentamiento espontáneo: poder y política (1976)』もこのやうなものである。また、サムエル・デル・ビヤール(Samuel del Villar)は

政治的要因を経済的要因、実定法上の要因と組み合わせることによって経済的資源の効果的配分を阻害する条件を見出すというわが国学界では異色の業績をあげた。⁽¹⁹⁾

雄誌 Foro Internacional⁽²⁰⁾には国際関係の論文とともにメキシコの政治と体制に関する研究が数多く掲載される。政治関係の特集号としては、『これまで La vida política en México, 1970-73 (1974), Las fronteras del control del Estado mexicano (1976), Las crisis en el sistema político mexicano, 1928-1977 (1977)』があった。最近掲載された論文の質から判断すると構造主義学派は今後も成果を生み続けるものと思われる。

一方、『Revista Mexicana de Ciencia Política』にも構造主義と接点をもち多くの論文が発表されてきた。⁽²¹⁾ 『Revista Mexicana de Sociología』⁽²²⁾では他のラテン・アメリカ諸国の研究者の論文にくらべてメキシコ人の投稿したものは少ないが、そのうちのいくつかは構造主義の範疇に属する。もっとも両誌ともマルクス主義学派が主流を占めており、この傾向は年々顕著になっていく。

(b) マルクス主義政治理論

メキシコではすでに十九世紀末から社会主義と無政府主義のさまざまな流れが影響をもちはじめ、政治理論の分野にも深い足跡を残しはじめていた。この分析方法を最初にとりあげたのはいわゆる知識層や学界ではなく、反体制運動の活動家たちであった。たとえば十九世紀末の *El Socialista* の論説や今世紀初頭 *Regeneración* に掲載されたフロレンス・マゴン兄弟の論文がある。⁽²⁴⁾

メキシコの現実を分析する方法としてマルクス主義を最初に用いた著名な大学人はビセンテ・ロンバルド・トレダーノ (Vicente Lombardo Toledano) であろう。彼は一九一五年世代の傑出した一員であり、革命の武力闘争が終った後メキシコの知識人の間で一世を風靡したかの有名な「七賢人」の一人であった。

ロンバルドは大学（最初はメキシコ国立自治大学、後に労働者大学）、労働組合（メキシコ労働者地域連合、メキシコ労働者連合、ラテン・アメリカ労働者連合の順）、政党（労働党、メキシコ革命党、人民党の順）の三つを舞台に絶え間

ない活動を続けた。一九三〇年以前の著作はやや漠然とした社会主義の流れに属するが、それ以降のものは——彼自身の言葉によれば——真正正銘のマルクス主義に立ったものと考えられる。⁽²⁵⁾ 主な論義は、メキシコ革命による国家資本主義を社会主義にいたる前段階として認めること、ソ連を擁護し北アメリカ帝国主義に間断なく攻撃を加えることであった。また、農地改革の中断、労働運動の抑圧、民主的手続の組織的侵害、富の集中など当初の革命プログラムにたいする政府の「裏切り行為」を告発することであった。自らのうちに避けがたい矛盾をかかえたロンバルドは結局一派を成さなかったが、彼に続いて体制内で活動を起そうとする社会主義者があらわれる。ナルシン・バソルス (Narciso Bassols) やアルベルト・ブレマウンツ (Alberto Bremanutz) がメキシコ革命になんとか左派の刻印を残そうとしたこの流れの代表的人物であった。⁽²⁶⁾ その絶頂がカルデニスマであり、そこで最後のエネルギーを消耗したのである。一九一九年以降体制外から左派の立場を推進する役割を担ったのがメキシコ共産党であった。しかし、ソ連の政策に拘束されることによる無定見と硬直的な姿勢のため、共産党から独創的な分析はついに生まれなかった。

六〇年代にはすでに大きな影響力をもつ一群のマルクス主義理論家があらわれていた。彼らの多くは共産党から独立した立場をとり、国立自治大学に集まっていた。⁽²⁷⁾ 経済学部にはアロンソ・アギラール (Alonso Aguilar)、フェルナンデ・カルモナ (Fernando Carmona)、ホルク・カリオン (Jorge Carrion) らがいて、「メキシコの奇跡」を分析した。⁽²⁸⁾ 安定持続成長⁽²⁹⁾ の有効性にたいする彼らの疑問は、その後必ずしも同じ理由からではないが多くの人たちの共有するところとなる。

政治社会学部でこの時期にマルクス主義の潮流をリードしたのはフランスから帰国したばかりの研究者グループであった。彼らは政治社会学部の専門化を進め、講義や *El Españador, Política* など左派の雑誌を通してメキシコの、また低開発国全般にわたる問題を描きだした。これにたいし、ビクトル・フロレス・オレア (Victor Flores Olea) やエンリケ・ゴンサレス・ペドレーロ (Enrique González Pedrero) は学外でラテン・アメリカにおける社会主義の問題にとりくんだ。⁽²⁹⁾ ホセ・レブエルタス (José Revueltas) のようにこの問題に独自の貢献をはたした知識人もいる。レブエルタスは、メキシコ共産党がなぜ労働者階級の政治的組織化に失敗した

のかを説明しようとした。⁽³⁰⁾ こうしてマルクス主義者の「討議集団」は大学の内外で増殖していった。当時はまだ冷静な分析よりも熱狂的雰囲気の方が勝っていたといえようが、理論上のリーダーシップをとる有能な人材も少しづつあらわれはじめたのである。

現在でも一部のマルクス主義分析にみられる硬直性には望むべき点が多い。もともと、このことはマルクス主義学派に限らず全ての学派に当てはまる。マルクス主義学派——すでにメキシコの主要な社会科学系教育研究機関において支配的立場を確立している——の最大の問題点は、機械論的単純化、理論適用の際の非柔軟性であろう。しかしこの学派を代表する人たちはすでに立派な理論的基盤をもっており、彼らの研究の中には優れたものがますます増えている。初期の段階に比べて彼らの研究が著しい進歩をとげてきたことは疑う余地がない。とくにこの十年がそうである。フランスの影響力が低下しイタリアの力が高まったという変化はあっても、メキシコのマルクス主義に主な影響を与えているのが今もヨーロッパであることに変わりはない。メキシコのマルクス主義各派の間の相違は、ある意味では世界レベルでの意見対立を再生産したものであるといえよう。近いところではアルチュ

セール派と反対派との論争がある。また近年メキシコでもグラムシンの著作は大きな関心をよんでおり、その影響はメキシコの現実を扱った数多くのマルクス主義的分析の中にすでにあらわれている。マルクス主義も他の思想同様、その理論的發展を今も外国に依存しているのである。

イタリア学派のマルクス主義者で政治社会学部の教授でもあるアルナルド・コルドバ (Arnaldo Córdova) の著作は、現代メキシコにおけるマルクス主義学派の最も真摯で完成された業績の一つであり、社会科学界で大きな影響力をもっている。彼の数多くの研究は現代史——革命から現代まで——のなかからメキシコの従属資本主義の本質を明らかにしようとするものである(もともと、マルクス主義学派、非マルクス主義学派を問わず、大部分の政治学者は同じ意図から歴史研究にとりくんでいるのだから、この研究戦略が彼の独壇場であるというわけではないが)。その中には、ポルフィリアート以来全ての体制を支配してきた経済発展というイデオロギーの誕生と変形をその時代(主に一九二九年まで)の政治的経済的状况と関連させて説明した大著が含まれている(31)。ポルフィリアートと革命の関係について彼が示したテーゼは、両者の間の類似点は相違点よりも大であり、ともにメキシコ

資本主義の建設を模索するというレフォルマ期にはじめられた歴史的プロジェクトの一部にすぎない、というものであった。もともと、革命の性格についての公式見解を再検討するという作業はマルクス主義学派だけでなく現在多方面でなされている(32)。コルドバにとって一九一〇年革命は厳密には今日まで言われてきたような社会革命ではなく——所有制度の変更が僅かであった——大衆蜂起であった。最近の研究、とくにカルデナス政権と労働者農民大衆との関係を扱った著書では、この命題を一層確かなものにするのが意図されている(33)。やはり政治社会学部の研究員でありマルクス主義学派の一人であるファン・フェリペ・レアル (Juan Felipe Leal) は、現代の社会・政治構造の説明を十九世紀、二〇世紀のメキシコ史に求めた。彼のばあいも自由主義者の勝利が出发点である。論文集 *La burguesía y el Estado mexicano* (1972) は、一九一〇年革命後に権力を奪取したのがなぜブルジョアジーでなく「政治・軍事官僚」であったのかを説明するために、「メキシコの資本主義発展の特異性」を示そうとしたものである。もともと彼の考えでは、この官僚制によって打ち建てられたメキシコという国家がもつ外見上の自立性はきわめて相対的なものであり、実際はブルジョアジーを強化する目的

で多数者をコントロールするのに、あるいは北アメリカという中心国の要求に適應するのに大いに役立ってきたのである。別の論文集 *México, Estado, burocracia y sindicatos* (1975) では——重複はあるが——このテーマを広げ、「パトロン国家」(財とサービスの生産者としての国家)が演じてきた役割の分析を通じて彼のテーゼを例証することに重点が置かれている。レアルの結論によれば、国营企業は国家の相対的自立性を維持する働きをしたものの、それは体制側イデオログがいたてたように国民の多数者の利益のためにではない。剰余価値を民間部門に誘導するための複雑なメカニズムとして作用したのであった。結局、「仲裁国家」は幻想であり、それは二つの利益、すなわち国家自身と大資本の利益の側にある。

レアルとコルドバの研究はメキシコの政治的現実を説明するための一般の枠組を提供するものである。しかし、その「効力」を実証するにはより多くの個別研究が必要であり、彼らのテーゼは確立されたものとはいえない。多くの個別研究がとくに国立自治大学で進められており、何点かはすでに出版済みである。たとえば、六八年の学生運動に関するセルヒオ・セルメーニョ (Sergio Zermeno) の著作がある。し

たがって彼らのテーゼを評価できるのも時間の問題であろう。⁽⁸⁴⁾
 アルトゥーロ・ウォーメン (Arturo Warman) の *Y venimos a contradecir: los campesinos de Morelos y el Estado nacional* (1976) は最も完成度の高い研究である。革命後の農民を描えこんでいる経済・政治構造間の関係が力強く描かれている。ごく最近の研究では、ルイサ・パレ (Luisa Paré) の *El proletariado agrícola en México: ¿campesinos sin tierras o proletarios agrícolas?* (1978) が興味深い。また、*Las trabajadoras en la historia de México* 十二巻が完成間近であり、やがて学界に大きく貢献するであろう。⁽⁸⁵⁾

一九七四年、季刊誌 *Cuadernos Políticos* が創刊され、学界に衝撃を与えた。帝国主義理論・従属理論の発展、社会主義問題、メキシコの社会階級と政治闘争に関する研究に寄与した。寄稿者の多くがメキシコ以外のラテン・アメリカ人とラテン・アメリカ以外のラテン・アメリカ研究者であるが、⁽⁸⁶⁾
 メキシコ人社会学者、経済学者の比重も増えてきている。

(c) 規範的研究

社会の現状にたいする批判や新しい価値基準の模索は全ゆる分野で全ゆる観点からなされてきた。厳密にいえば社会科学の全ての研究が規範的側面を含んでいる。政治学者もその職業倫理に忠実であればあるほどより完全な政治モデルを引照基準にすることによって、自己のイデオロギー的立場を離れて現状にたいする批判者となる。しかし政治分析のなかには批判的側面がより顕著であり、変革のよびかけが一層強いものがある。それをここでは規範的研究とよんでいる。六八年¹以来規範的研究が急激に増えたことは明らかである。多くのばあいジャーナリズムがこれらの研究の発表の場となった。

体制や国家、さらには政治生活全般にわたる規範的分析の立場を確立するのに大学人以上に成功した政治記者の代表として、カルデナスの伝統を受けつぐフランシスコ・マルティネス・デ・ラ・ベガ (Francisco Martínez de la Vega) をあげることができよう。彼はカルデナス時代にみられた民族的・国民的尊厳と現在の状況を重ね合わせることによって、世論に重きを置いた規範的思考を生みだした。ホセ・アルバ

ラド (José Alvarado) も同じ考え方に立っている。マヌエル・モレノ・サンチェス (Manuel Moreno Sánchez) は、権威主義の実態を直接経験した者の目で、ジャーナリズムや著書 *Crisis política en México* (1970) を通して、支配形態としての権威主義がもつ欠陥を暴いた。近年特異な影響力をもった論説者はガストン・ガルシア・カントウ (Gastón García Cantú) である。公共の徳義の必要をうったえる猛烈な彼の論調、そして現代をメキシコ史上の絶頂期と比較する作業は、国民的尊厳の復活を追い求めている。影響力をもったジャーナリストは他にも多くいることをつけ加えておこう。ジャーナリズムは当然各党派の立場を伝える手段でもある。マヌエル・メルクエ・パルディニャス (Manuel Mercué Pardiñas) は六〇年代、雑誌 *Política* を通して大きな影響を与えた。エベルト・カステイロ (Heberto Castillo) は自らの率いるメキシコ労働者党の立場を推進するため、ジャーナリズムを使って、国民大衆の権利回復闘争を政治的に組織化する必要をうったえ、また、時事問題にたいする批判を続けてきた。国民行動党主流の立場は、フアン・ホセ・イノホーサ (Juan José Hinojosa) によって、ならにホセ・アンヘル・コンチェーヨ (José Angel Conchello) の一層積極的

なジャーナリズム活動によって一般に知られるようになった。労働者社会党の指導原理を支えてきたのはロベルト・エスペロン (Roberto Esperón) である。共産党の立場を一人の論説家によって代表させることはむずかしい。党の方針を支えてきた人々には、アルノルド・マルティネス・ベルドゥーゴ (Arnoldo Martínez Verdugo)、アルトゥーロ・マルティネス・ナテラス (Arturo Martínez Nateras)、ラルド・ウンスエタ (Gerardo Unzueta) がおり、Historia y Sociología などの雄誌で論陣を張った人々にはエンリケ・セーモ (Enrique Semo)、ロジャー・バルトラ (Roger Bartra)、セルヒオ・デ・ラ・ペーニャ (Sergio de la Peña) らの大有人在。トロツキストの流れを継いだアドルフ・ギリ (Adolfo Gilly) はいくつかの知識人サークルで大きな影響力をもっている。彼の La revolución interrumpida (1972) は広く論議された著作である。

カルロス・モンシバイス (Carlos Monsiváis) はジャーナリスト、政治評論家としてどれかの党派に——彼自身の言葉によれば——入れることはできない。Días de Guardar (1969) と Amor perdido (1977) には彼のジャーナリスト活動から生れた最良の政治評論が収められているが、注目す

べきなのは、直接政治問題には関係のない評論においても自身が不安と失望を抱くこの社会の病巣をえぐり出していることである。治療が困難な病であればこそ、理性と皮肉によって病巣を切開き、取りだしてみなければならぬ。⁽³⁷⁾

八 国際関係

メキシコでは国際関係の研究を政治学とは別の分野と考える傾向がある。しかし他の国々では国際関係を広範な政治現象の側面とみており、われわれもそれにならうことにしよう。

メキシコの国際関係に関する文献は少なくない。コシオ・ビエガスは一九六六年、国際関係の文献紹介の中で一万点以上の著書、冊子、政府刊行物を挙げた。⁽³⁸⁾ 最初にふれた国立人類学歴史学研究所の資料にも主要著作約六〇〇点が記されている。⁽³⁹⁾

テキサスを失い一八四八年の戦争に敗れて以来メキシコにおける合州国の存在は圧倒的なものであったから、十九世紀の半ばからメキシコの国際政治にとりくむ者の最大の関心が合州国との関係に向けられてきたことは容易に想像できよう。

ヨーロッパとの関係も十九世紀初めから、とくにフランスの干渉とマクシミリアーノの帝政時代（一八六一—一八六七）以降さかんにとりあげられた。しかし一九一〇年革命ののちメキシコが完全に北アメリカの勢力圏に入ったため、合州国との関係こそ何にもまして緊急の課題であると考えられ、旧大陸との関係を扱う研究は地歩を失った。

国境の南にたいする関心が極度に高まったことは一度もない。この分野ではベリセヤソコムスノ問題に関する歴史的、法律的研究が主流を占めている。他のラテン・アメリカ諸国にたいする関心はさらに低かったが、それでもアジア、アメリカにたいする関心を常に大きく上まわっていた。たとえば、エル・コレヒオ・デ・メヒコ国際研究センター編 *México y América Latina: la nueva política exterior* (1974) がある。アメリカ大陸と西ヨーロッパ以外の国々にたいするメキシコ外交の幕開けはごく最近のことで、専門書も出はじめたばかりである⁽⁴⁰⁾。

国際機構との関係は順調にはじまったわけではない。革命後列強諸国の利益に沿わぬ政策をとったため、国際連盟はしばらくの間わが国の加盟を認めなかったのである。国際連合と米州機構が設立されてからは、国際機構にたいする関心が

ロレンソ・メイエル、マヌエル・カマーチョ「メキシコの政治学—その発展と現状—」

(三八五)一五七

高まりメキシコの行動もより現実的なものとなった。現在この分野の研究は比較的多く、中には非常に優れたものがある⁽⁴¹⁾。

国際関係の理論的側面については、大部分の研究が法律上の問題を扱っている。法律上の議論が合州国にたいする数少ない効果的防衛手段の一つだからである⁽⁴²⁾。国際システムに関する厳密に政治学的な分析は少なく、大部分は欧米の理論に依拠しており、まずまずの内容である。従属理論によってラテン・アメリカの学界は国際政治理論の新局面を拓いたといえようが、この理論はもともと大陸の南の諸国で発展したものである。メキシコでもさかんに受入れられたが、この分野でのメキシコ人学者の貢献は決定的なものではなかった。もっとも、わが国の具体的経験に適用することによってこの理論を精密化したことは事実である⁽⁴³⁾。

合州国—メキシコ関係の研究にメキシコ人ばかりでなく北アメリカ人もとりくんだのは当然である。実際、両国関係についての最初の総合的ビジョンは北アメリカ人が提出した。しかも当初から明確なイデオロギー的立場を打出していた。

たとえば、ゴーマン・アボット (Gorman Abbott) は西ヨーロッパの旧体制から新大陸の自由を守ることでメキシコと合州国は同じ利害をもつと主張したし、ジェームズ・F・リッ

ギー (James F. Rippey) や ジェームズ・モートン・キャラハン (James Morton Callahan) はとにかくも革命後のメキシコと合州国との平等な関係を唱えた。⁽⁴⁴⁾ 最近の研究はメキシコの政治と国際政治に生じた変化を反映しており、したがって少しバランスがとれたというか、以前より単純ではなくなった。中心となるテーマが修正されたのである。たとえばカール・シュミット (Karl Schmitt) の *Mexico and the United States, 1821-1973* (1974) がある。シュミットはメキシコの北アメリカにたいする従属の絆が強固であることを認めている。すなわち、メキシコは国内のまとまりを維持し独自の財源を強化したうえで、「アメリカの基本的な国際的利害が西半球、とくにメキシコに集中しないように神に祈る」ことによってはじめてワシントンからある程度の独立を保てるであろう。いずれにせよメキシコの自立を支える基盤は非常に不安定なのである。ラテン・アメリカにおける冷戦がイデオロギー的観点からはそれほど決定的な要素ではなくなり、東南アジアでの敗退によって合州国市民の間に現実主義と懐疑主義がかなり広まった現在では、メキシコ研究に従事する北アメリカの学者も不平等発展の産物である従属とか利害の不一致といった要素をその分析に導入する必要を認めざるを

えなくなったように思われる。

では、われわれの側から見た両国の関係はどうか。かつてメキシコの自由主義者は北アメリカを強力な同盟国でありわれわれメキシコ人が感化を受ける源泉であると考えていたが、十九世紀初頭のこの幻想が崩壊してからというもの、メキシコ人学者は北アメリカの対メキシコ政策に含まれる帝国主義的要素を明らかにしようと努めてきた。この点は、少なくとも第二次大戦までの期間、右派と左派の見解が一致した数少ない例である。保守派の立場を示すものにはアルベルト・マリア・カレリーニョ (Alberto María Carreño) の総合研究があり、また、モンロー主義に関するカルロス・ペレイラ (Carlos Peñalosa) の著作、ウィルソン外交についてのフランシスコ・ブルネスの著作、国際法からみた両国関係についてのトリビオ・エスキベル・オブレゴンの著作などの個別研究がある。⁽⁴⁵⁾ 保守派の研究には、イスパノアメリカ文化を支えてきた原理に敵対しこれを破壊してしまふ物質主義的プロテスタント文明の抑制不可能な膨脹ぶりにたいする恐れが表われている。この考え方のゆきつく頂点が前述したバスコンセロス⁽⁴⁶⁾の著作である。

当然左派も北アメリカの政策にたいする批判という点では

ひけをとらない。とくに二〇世紀になってからはそうである。マゴン兄弟の著作は、北アメリカ帝国主義にたいする、またそれがポルフィリオ体制下のメキシコに及ぼしている影響にたいする正面攻撃のあらわれであった。アンドレス・モリナ・エンリケスがメキシコの支配集団は特権的賓客Ⅱ北アメリカ資本に迎合して自国の政治過程にたいする統制力を失ってしまった⁽⁴⁶⁾ことを明らかにしたのも、二〇世紀初頭であった。革命とそれに伴う北アメリカとの間の紛争はこの考え方の糧となり、左派の論調は今も衰える気配をみせていない。世論に大きな影響力をもったガルシア・カントウのばあいはその典型である。⁽⁴⁸⁾

一般に、民族主義的・防衛的立場をとるこれらの著作は北アメリカ帝国主義の行動だけでなく外国権益と国内の集団との間の同盟関係にも焦点を当てているといえよう。そうすることによって保守派は政敵(古典的な例にはフアレスによる悪名高きマックレーン・オカンポ条約の受容がある)を攻撃し、左派は二つの資本主義の同盟の中にメキシコの民族主義的国家建設を挫折させるトロイの馬を見たのである。

国際関係論の専門課程を最初に設けたのはメキシコ女子大学であった。すでにふれたように国立自治大学政治社会学部

は一九五一年に創設されたのだが、同学部は当初から外交学科を持っていた。それが一九六七年に拡充され国際関係学科となった。現在の政治社会学部には国際関係センターが付置されている。今では国際関係の研究教育機関はこれだけではなく、エル・コレヒオ・デ・メヒコも一九六一年に国際研究センターを開設し、同時にセンターの研究誌 *Foro Internacional* を創刊した。学部レベルでの国際関係研究は近年になってラス・アメリカス大学や国立自治大学の付属専門学校のいくつかでも行われている。

メキシコで国際関係が独自の専門分野として研究されるようになってからまだ日は浅いが、蓄積されはじめた研究の重みはすでに感じられる。しかもそれらの研究は、一時期この分野では唯一の専門家であった国際法の権威——アントニオ・ゴメス・ロブレド (Antonio Gómez Robledo)、『アルフォンソ・ガルシア・ロブレス (Alfonso García Robles)』、『フランシスコ・クエバス・カンシーノ (Francisco Cuevas Cancino)』、『ホルヘ・カスタニエーダ (Jorge Castañeda)』——の研究に比べても遜色のないものである。一九五六年ホルヘ・カスタニエーダの *México y orden internacional* が出版された。これは、狭い法律学的接近方法から政治的変数

を積極的にもり込んだ分析——彼のばあいはメキシコの国連加盟に際して国内の主要集団がとった立場の分析——へと移る過渡期にあらわれた研究の好例である。条約や国際機関における数多くの決議を引用することによって全てを論証してゆくという法律学の伝統は、国際政治学にも受け継がれた。

ルイス・G・ソリーヤ (Luis G. Zorrilla) / ロレンソ・メイエル、ベルタ・ウヨア (Berta Ulloa) の研究のように外交文書の中に解答を見出すばあいもある。⁽⁴⁹⁾

同時代の国際関係を研究するばあいは外交文書に依拠することができない。基本的には論文、新聞、雑誌類、政府刊行物を資料にせざるをえない。インタビュもまた一つの方法である。この種の研究の例が、オルガ・ベイセル (Olga Peñiccer) / マリア・デル・ロサリオ・グリーン (María del Rosario Green) / マリオ・オヘダ (Mario Ojeda) の著作である。⁽⁵⁰⁾ ペイセルはキューバ革命——これにひきくらべてメキシコ革命のいくつかの側面に疑問を呈しながら——にたいするメキシコの政策を、外交政策形成過程の特徴をひきだすための格好の対象として扱っている。メキシコ政府の立場、企業界、ジャーナリズム、左翼団体など国内圧力集団の立場、さらには合州国、ラテン・アメリカ諸国など外国政府の影響

力が組になって分析の対象となった。そして、対外政策が国内の分裂を回避し政府の立場を正当化する役割をはたしたことが明らかにされた。グリーンの研究は、メキシコと工業大国との関係の重要な側面——公共部門の外国債務——を説明するの国内要因を一層重視している。すなわち、最近の著しい債務増加はメキシコ経済が抱える欠陥を知ることによってのみ理解できる。もっとも、その借款方式といえ、外的要因にもとも制約されているのだが。

一九七六年マリオ・オヘダはメキシコ外交政策研究の真空地帯をうめようとした。対外政策の総合的把握である。彼は、国際システムの二極構造、冷戦、北アメリカの覇権主義といった巨大な国外環境と、地政学的条件や外交政策の伝統的方针からはじまり貿易、投資、債務といった外交政策の基礎となる経済的条件にまで及ぶメキシコ自体の要因とを結びつけている。メキシコは国家目標を追求するにあたっていかにすれば自立行動能力を最大化しうるか、それを考えるのが彼の研究の目的であった。対外関係について現在行われている研究はたしかに過去の研究にくらべて一層客観的になっているが、防衛的・反帝国主義的な背景が消えてしまったわけではない。対米関係における脅迫観念は今も存続している。メキ

シコ人研究者の目標には共通分母がある。メキシコのような従属国の自立性を高めるためにはいかなる方法があるのかを指摘することである。「真の」独立の可能性がとくに左派の研究では論じられる。しかしそれは近い将来の可能性というより、むしろ理想状態として設定されている。彼らの研究では、真の独立とは国内支配システムの完全な転換を予め必要とする革命計画の一部なのである。マルクス主義者も資本主義構造を維持したままでメキシコがその国際的な自立を多少拡大する可能性を全く否定しているわけではないが、彼らの見解はますます悲観的なものになってきている。国内大資本が暗黙裡にすすめているのは自立に基づく経済発展計画——一時はそうであったのだが——ではないと彼らは考えている⁽⁵¹⁾。これにたいし、オヘダのように社会主義革命の実現がメキシコの対外行動能力を拡大するための必要条件であるとは考えないものは、部分的勝利の可能性を最大にする方法を模索している。唯一最良の目標ではないが、実現可能な目標として相対的自立を選択するのである⁽⁵²⁾。

一方、保守派は北アメリカ勢力の浸透にたいする抵抗を放棄してしまつたように思える。アングロサクソンによる支配に敵対した伝統的保守派は、「近代的」保守派の前に屈服した。

近代派は国際大資本の事業計画の一端を担うことを願つており、彼らの恐れるのは国際大資本の浸透ではなくその事業計画の枠外に放り出されること——そのような事態は起りそうもないが——なのである。伝統的保守派は現在でも存続しているが、メキシコの国際的役割に関する彼らの考えを学界で表明するのをやめてしまつたし、近代派は実践にのみ関心があるようで、国際大資本の事業計画を理論的研究の対象にするというめんどうな仕事は避けてきた。

メキシコの国際的立場についての体系的分析ははじまつたばかりである。現在、エル・コレヒオ・デ・メヒコ、国立自治大学、首都自治大学、経済研究教育センターなどで多くの研究計画が進行中である。政治学一般と同様この分野でも各学派の見解は異なり、対立がある。しかしメキシコの国際的従属という状況は明らかであるから、見解の相違は政治学の間であらう。主な相違は分析方法の適確性をめぐつてであり、研究の基本目標がメキシコの自立発展をほむむ全ゆる状況を体系的に批判することにあるのはかわりがない。

九 メキシコにおける政治研究の特殊性

どの国でもそうであるように、メキシコの研究者も現実問題にかかわっており、そこからさまざまな影響を受けている。ある分野では財源や図書館や資格をもった調査員の不足が研究の可能性をせびめている。しかし自然科学・応用科学とちがって政治学ではこれらの不足は、少なくともメキシコ市ではそれほど深刻ではない。研究の遅れや困難はあるにしても、結局はどんな資料にも接近できる。

メキシコの研究状況を合州国のばあいと比較した際に目につく特殊性は、政治学部卒業性の就職先であろう。北アメリカでは八〇%以上の政治研究者が大学を離れないの⁽⁵³⁾にたいし、メキシコでは大部分が高級官僚群を肥大させる役割をはたしている⁽⁵³⁾と断定してもよいであろう。公職は単なる職であるだけでなく、威信の源泉でもあり、教育研究機関が抱える経済的制約を個人的レベルで解決する手段にもなっているのである。それゆえ、学生時代に、あるいは卒業後もつづけて左翼的立場を維持してきた人々の中にさえ公職に魅力を感じ、研究者がでてくる。このような状況はしばしば研究の質を低下さ

せることになる。公職に就くために進んで研究結果を示そうとする者もいるし、逆に多くの人達はいまいさこそ必要な政治の世界で自らの立場を明らかにしては公職に就くのに不利だと考えて、書くのをやめてしまっているのである。

メキシコにおけるこのような政治研究の特殊性は、経験的研究がほぼ不可能な閉鎖的政治システムを分析する際には障害となる。メキシコでは一部の研究対象に接近することが困難であったり、主要な政治交渉に関する記録が欠けていたり、国内統計が不備なのは事実である。そのために研究がはばまれ、あるばあいには不可能になっていることも確かである。しかしこれらの障害は過大視される傾向にあるようにも思われる。少しの創意と大きな努力があればたいのいばあい解答は見つかる。

十 展望

最後に政治研究の各学派がもつ可能性と限界についてかんとんにふれて結論にしよう。

メキシコ社会がこれまでのように驚ろくほど不公正な社会でありつづければ、当然規範的研究には大きな発展の可能性

がある。そして、最近の経験から判断すれば政治学の厳密な枠組にとられずに研究する方が発展の可能性は一層大きい。もっともこのことは過去の研究のばかげたりかえしではなく、それを克服しようとするばあいにはみあてはまる。政治家も現実を批判しそれに代わるモデルを提案する際にこの種の活動を行なう。しかし往々にして彼らは目前の政治課題に把えられてそれを乗りこえられないから、新しい有効な国民的計画を体系化することができないで来た。

行動主義学派はメキシコの実際の政治生活、なかでも世論や政治的コミュニケーションについての理解を深めるのに貢献しうる。しかし、経済的資源、人的資源の不足はこの方向に研究が発展するのを困難にしている。理論的側面ではメキシコ人研究者が貢献できる範囲はきわめて限られている。標本の収集と蓄積、再調査、時間的空間的分析とその比較といった北アメリカのような社会では可能な作業が、メキシコでは多くの障害のためほとんど実施不可能である。

構造分析およびそれに類する比較政治のような方法は、選挙の過程や法令などの規範がもつ効果、体制に特有な諸制度、政治的階級といった問題、つまりメキシコの政治システムにおける人と制度と論理を根本的に理解する上で最も大きな可

能性をもっている。同様に、歴史研究についてこの学派がもつ理論的展望を利用することも大いに役立つであろう。また構造主義と史的唯物論の折衷的方法是、メキシコの現体制を知り、近い将来体制内に生じる変化あるいは体制自体の変化を知るための重要な方法となる。しかし、理論的貢献の可能性は行動主義のばあいほどでないがやはり大きなものとは思えない。別のさまざまな体制についての情報が必ずしも手許にあるわけでもなく、比較分析が困難である。近い将来実現できそうなのは、重要なケース・スタディを積み重ねて現在一般に受入れられている考え方を補強・確立すること、あるいは逆に論破することである。理論的批判によってそれを行なうことも可能であろうが、いづれにしても理論体系の構築はむずかしい。

史的唯物論のばあい、わが国のこれまでの理論展開、応用を通じた理論の精密化には重大な限界があったから、マルクス主義政治理論一般が今後メキシコで大いに発展しうるかどうか予測がむずかしい。マルクス主義を通して階級、階級組織、国家、体制の性格などの実把握が進められることは充分ありえよう。メキシコ人政治学者の相当数、おそらく過半数がこの種の研究に従事している。

メキシコの政治学全体の発展はわれわれ自身の政治生活、われわれ自身の社会についての認識を深めることによって可能になるのだといいたい。以前は、どうであれ今やメキシコ人学者は自らの国の現実を外国人研究者よりも一層深く知りはじめた。今後この傾向に拍車がかかるものと思われる、われわれは大いに勇気づけられる。そのうえで望むべきは、これまで指摘してきた方向からあまり逸れずに——むずかしいことだが——基本理論での貢献をなすことである。

最後にメキシコ人研究者は厳密な理論構成が不得手であることを指摘しておこう。理論構成をいいかげんにすまず風潮が蔓延しているようにささみえる。もっとも、わが国の政治学界のより重大な欠陥は別にある。それは研究と実践活動のどちらかを選択しなければならないという永遠のジレンマからきている。このジレンマに直面して、大学人としても官僚としても政党人としても中途半端な形で終わってしまうは、わが国では一般的である。この点ではメキシコは政治学発展の豊かな土壌を持っているとはいいたい。そのために内外の政治生活を理解するうえでメキシコが独自の永続的な貢献をはたすのが困難になっている。

(一) Héctor Aguilar Camín, et al., *El Poder en México. Balance y perspectivas de la historiografía política en Mé-*

xico, 1951-1972, (mimeo), México, Instituto Nacional de Antropología e Historia, (1974).

(2) 十八世紀に書かれたメキシコの社会政治史。Los tres siglos de México bajo el gobierno español の題で一八三六年に出版された。

(3) Fray Gerónimo de Mendieta, *Historia eclesiástica indiana*, 植民地時代の政治理論に関する研究だが、José Miranda, *Las ideas y las instituciones políticas mexicanas, 1520-1820* (México, 1952) を参照。

(4) *Historia real sagrada, luz de principes y subditos* (1762)

(5) *Capítulos de historia y disertaciones* (México, 1944)

6 中のエドムンド・O'Gorman の著作を参照。Edmundo O'Gorman, *El pensamiento político del padre Mier* (México, 1945), *Memorias y escritos de Fray Servando Teresa de Mier* (México, 1945).

(7) Lucas Alamán, *Disertaciones sobre la historia de la República Mexicana* (México, 1844), *Historia de Méjico, 5 vols.* (México, 1849-1852).

(8) 自由主義派の政治理論に関する最近の研究。Jesús Reyes Heróles, *El liberalismo mexicano* (México, 1957-1961) 全三巻を参照。Charles A. Hale, *El liberalismo mexicano en la época de Mora* (Mexico, 1972) を参照。

(9) México y sus revoluciones (Paris, 1836).

(10) La sucesión presidencial en 1910 (San Pedro, Coahuila, 1908).

- (9) Moheno, ¿Hacia dónde vamos? Bosquejo de un cuadro de las instituciones políticas adecuadas al pueblo mexicano (México, 1908) ; Senttes, Organización política de México (México, 1908)° 國家論の中心としてメキシコに於ける Filomeno Mata, Luis Cabrera の論議を参照°
- (11) Gonzalo Aguirre Beltrán, Ricardo Flores Magón : Antología (México, 1970)°
- (12) Bulnes, El verdadero Dias y la Revolución (México, 1920) ; Esquivel Obregón, Mi labor en servicio de México (México 1934) ; Vera Estañol, Historia de la Revolución Mexicana (México, 1957)°
- (13) 例が多し° 特別な派閥闘争の中心を書かれた数回りの著者著作のなかで最近のものはそのなかで最も優れたものといえる° Luis Cabrera, El balance de la Revolución (México, 1931) ; Emilio Portes Gil, Quince años de la política mexicana (México, 1941) ; Alfonso Taracena, La verdadera revolución mexicana, 6 vols. (México, 1960-1965) ; Vito Alessio Robles, Desfile sangriento (México, 1936) ; Félix Palavicini, Mi vida revolucionaria (México, 1937) ; Alberto J. Pani, La política hacendaria y la revolución (México, 1926) ; José Manuel Puig Casauranc, Galatea rebelde a varios Pignaliones (México, 1938) ; José Vasconcelos, Obras completas (México, 1961)°
- (14) その他前掲のロンドン派外国人の著者に関する研究に Carlton Beals, Mexico, an interpretation (New York, 1923) ; Edward

- A. Ross, The social revolution in Mexico (New York, 1923)
- Lesley Byrd Simpson, Many Mexicos (Los Angeles, 1941)
- を参照° 反文派の思想の例としてドナルド・ケリーの著した Kelley の書もまた The Mexican question (New York, 1926) を参照°
- (15) Enrique González Pedrero, “A propósito de la creación de la Facultad de Ciencias Políticas y Sociales”, Revista Mexicana de Ciencia Política, no. 51 (enero-marzo, 1968), p. 167°
- (16) たゞその著者大統領 José López Portillo ならば、彼は我邦を襲った政治的危機に際しては、政治的強硬派の一人としてのみならず、國家論を講じた。また現在の大統領（一九七九年末に就任—記者注） Jesus Reyes Heróles も政治学出身の巨擘の好例を参照°
- (17) 例として “Tendencias políticas en Mexico”, Foro Internacional, no. 64, vol. XVI (junio, 1976) ; “La imposible democracia mexicana”, Vuelta, no. 1, vol. 1 (diciembre, 1976) を参照°
- (18) この全集の大部分は歴史学者の手によるが、一部は Lorenzo Meyer, Rafael Segovia, Luis Medina, Blanca Torres, Olga Pellicer などの政治学者と社会学者による。José Luis Reyna の著書も参照°
- (19) El estado de derecho. La eficiencia y el crecimiento económico de México (México, 1979)°
- (20) ホル・ロビンソンの「メキシコ国際研究センター」機関誌° 一九七一年にメキシコ・ロンドン・ゴエガマが創刊された°

- (21) マキニコ国立自治大学政治社会学部機関誌「一九五四年創刊」
 雑誌掲載のその論文は、Henrique González Casanova,
 「La comunicación gubernamental」(julio-sept. 1970); Ho-
 racio Labastida, 「Sociedad y política」(abril-junio, 1971);
 Arturo González Cosío, 「Reflexiones para una teoría de
 las clases sociales」(junio-sept., 1969) などである。
 雑誌の編輯長は、その編集長である Raul Olmedo,
 「La sociología del crecimiento」(octubre-dic., 1970).
 (22) マキニコ国立自治大学社会学部機関誌「一九三一年」中 Lu-
 cio Mendieta y Nuñez 著編。
 (23) Gastón García Cantú, El socialismo en México (México,
 1969).
 (24) マキニコ社会学部社会学部機関誌「一九三一年」中ラウ-
 リオ・メンディエタ・イ・ヌニェス著「El derecho público y las nuevas corrientes filo-
 sóficas」(1919), La libertad sindical en México (México,
 1926), La doctrina Monroe y el movimiento obrero (México,
 1927), El drama de México. Nuestros grandes problemas
 económicos (México, 1954), La evolución de México du-
 rante la primera mitad del siglo XX (México, 1956), Teoría
 y práctica del movimiento sindical mexicano (1961) など
 著書がある。
 (25) Narciso Bassols, Obras (Mexico, 1964); Alberto Bre-
 mauntz, Panorrama social de los revoluciones de México
 (México, 1962).
 (26) ハンター・カスター著、松本和成訳、長瀬和夫監訳、José Revue-
 lta, Ensayo sobre un proletariado sin cabeza (México,
 1962); José Luis Ceceña, El capital monopolista y la ec-
 onomía de México, (México, 1963)
 (27) Alonso Aguilar, Teoría y práctica del desarrollo lati-
 noamericano (México, 1967), Dialéctica de la economía
 mexicana (México, 1968); Fernando Carmona, El dilema
 de América Latina. El Caso de México (México, 1964);
 Jorge Carrón y Fernando Carmona, Tres culturas en agonía
 (México., 1969).
 (28) Víctor Flores Olea, Socialismo y política en América
 Latina (México, 1966); Enrique González Pedrero, La Re-
 volución Cubana (México, 1959), El gran viraje (México,
 1961), Anatomía de un conflicto (Jalapa, 1963).
 (29) Ensayo sobre un proletariado sin cabeza (México, 1962.)
 (30) La ideología de la Revolución Mexicana. Formación
 del nuevo régimen (México, 1973).
 (31) Lorenzo Meyer, 「Continuidades e innovaciones en la
 vida política mexicana del siglo XX. El antiguo y nuevo
 régimen」, Foro Internacional, Vol. XVI, no. 1 (julio-sept.
 1975).
 (32) La formación del poder político en México (México,
 1972), La política de masas del cardenismo (México, 1974).
 (33) マキニコ社会学部機関誌「一九七五年」中 Ariel José
 Contreras, México, 1940: industrialización y crisis política

- (México, 1977); Mario Huacuja y José Woldenberg, Estado y lucha política en el México actual (México, 1976); F. J. Paoli y Enrique Montalvo, El socialismo olvidado de Yucatán (México, 1977); Sergio Zermeno, México: una democracia utópica (México, 1978). この自身もまた彼の理論的枠組に肉付けを行なっている。研究の進展のめざましさをいかにせよ、キリシタン主義の「Orígenes y desarrollo del artesanado y del proletariado industrial en México, 1867-1914」(s. f.) を論じて、このキリシタン主義の「Los maestros rurales en el cardenismo」, Cuadernos Políticos (octubre-dic., 1974) にあるのは、このキリシタン主義を論じている。またロシター・マンロー他の Caciquismo y poder político en México (México, 1975), Estructura agraria y clases sociales en México (México, 1974)
- (25) 著者等は、Pablo González Casanova, Alejandra Moreno, Enrique Florescano, Juan Felipe Leal, Salvador Hernández, Sergio de la Peña, Luisa Paré, José Ma. Calderón, Ricardo Pozas H., Roger Bartra, José Rivera Casto, Samuel León, Arnaldo Córdova, Jorge Basurto, José Luis Reyna, Aurora Loyo, Raúl Trejo, Octavio Rodríguez Araujo, Víctor Manuel Durand, David Maciel, Manuel Carnacho.
- (26) この雑誌の理論的傾向をリードしたメキシコ人の論文には次のものがあろう。Carlos Pereyra, 「México: los límites del reformismo」, Cuadernos Políticos, no. 1 (Julio-sept., 1974); Rolando Cordera, 「Los límites del reformismo: la crisis

del capitalismo en México」, no. 2 (octubre-dic., 1974); Julio Labastida, 「Nacionalismo reformista en México」, no. 3 (enero-marzo, 1975); Arnaldo Córdova, 「Los orígenes del Estado en América Latina」, no. 4 (sept. dic., 1977).

(27) 現在の政治ジャーナリズムについて詳細な分析をこの行なうことはできないが、それぞれの流れを代表する人物を挙げるに次のものがあろう。Miguel Angel Granados Chapa, Jorge Hernández Campos, Elena Pomiatowska, Héctor Aguilar Carrón, Carlos Pereyra, Francisco Paoli, Froylán López Narváez, Raúl Olmedo, León García Soler, Samuel del Villar. Luis Spota と Manuel Blandia, José Luis Mejías は著者では評価されていないが、世論に大きな影響力をもちジャーナリストの好例である。才気あふれる歴史家であり哲学者でもある Luis Villoro は、時々ではあるが新聞・雑誌に寄稿し自分の立場を表明している。その著書と説話によってメキシコで最も完成された観念論者の一人と考えられている。Gabriel Zaid は従来のインテロキーによって位置づけられることはむずかしい。彼の鋭い批評と折衷的な論議は論じがたいものである。

(28) Daniel Cosío Villegas, Cuestiones Internacionales de México. Una bibliografía (México: Secretaría de Relaciones Exteriores, 1966).

(29) 注(1)参照。

(30) Humberto Garza E., China y el Tercer Mundo. Teoría y práctica de la política exterior de Peqín, 1956-1966 (México, 1975).

- (㉔) Jorge Castañeda, México y el orden internacional (México, 1969); César Sépulveda, El sistema interamericano (México, 1974); Antonio Gómez Robledo, La seguridad colectiva en el continente americano (México, 1960), Las Naciones Unidas y el sistema interamericano (México, 1974).
- (㉕) 法隆・ユリ Jorge Castañeda, Valor jurídico de las resoluciones de las Naciones Unidas (México, 1967) 法隆の「
(㉖) Julio Labastida Martín del Campo, ‘Proceso político y dependencia en México’, 1970-1976, Revista Mexicana de Sociología, Vol. XXXIV, no. 1 (enero-marzo, 1977); Lorenzo Meyer, ‘Cambio político y dependencia. México en el siglo XX’, en Centro de Estudios Internacionales, La política exterior de México: realidad y perspectivas (México, 1972); Victor M. Durand Ponte, ‘México: dependencia o independencia en 1980’, en El Perfil de México en 1980 (México, 1972).
- (㉗) Gorman D. Abbott, Mexico and the United States. Their mutual relations and common interests (New York, 1869); James Morton Callahan, American policy in Mexican relations (New York, 1932); James F. Rippey, The United States and Mexico (New York, 1931); Howard F. Chene, The United States and Mexico (Cambridge, Mass., 1953).
- (㉘) Francisco Bulnes, The whole truth about Mexico: President Wilson’s responsibility (New York, 1916); Alberto María Carreño, La diplomacia extraordinaria entre México y los Estados Unidos, 1789-1947, 2 vols. (México, 1951); Carlos Pereyra, La doctrina Monroe: el destino manifiesto y el imperialismo (México, 1908); Toribio Esquivel Obregón, México y los Estados Unidos ante el derecho internacional (México, 1926). ‘メキシコと米国の外交関係の歴史’ El proconsulado (México, 1939) 『法隆の』
(㉙) 福澤諭吉小沢誠‘日米外交の歴史’
(㉚) 久米邦武 Isidro Fabela, Historia diplomática de la Revolución Mexicana, 2 vols. (México, 1958-59); Aaron Sáenz, La política internacional de la Revolución (México, 1961).
- (㉛) 久米邦武 Mario Gil, Nuestros buenos vecinos (México, 1957); Gastón García Canú, Las invasiones norteamericanas en México, (México, 1971).
- (㉜) Luis G. Zorrilla, Historia de las relaciones entre México y los Estados Unidos de América, 2 vols. (México, 1966); Berta Ulloa, La revolución intervenida (México, 1971); Lorenzo Meyer, México y los Estados Unidos en el conflicto petrolero (México, 1972); Jorge Basurto, El conflicto internacional en torno al petróleo de México (México, 1976).
- (㉝) Olga Pellicer, México y la Revolución Cubana (México, 1972); María del Rosario Green, El endeudamiento público externo de México, 1940-1973 (México, 1976); Mario Ojeda, Alcances y límites de la política exterior de México (Mé-

xico, 1976).

(15) 『メキシコへの帝国』 José Luis Cebalá, México en la Órbita imperial (México, 1970).

(16) 同様の立場からメキシコ外交の歴史を戦略・戦術にわたって例示『El Colegio de México, Centro de Estudios Internacionales, La política exterior de México: realidad y perspectivas (México, 1972), Continuidad y cambio de la política exterior de México: 1977 (México, 1978)].

(17) Dwight Waldo, 'Political Science: tradition, discipline, profession, science, enterprise', in F. Greenstein & N. Polsky, eds, Handbook of Political Science, I (Mass., 1975).

(Lorenzo Meyer y Manuel Canacho, 'La ciencia política en México: su desarrollo y estado actual', en Colegio de México, Ciencias sociales en México: desarrollo y perspectiva, El Colegio de México, 1979. © El Colegio de Mexico)

原著者

ロレンソ・マイエル——メキシコ大学院大学

国際関係学センター長

マヌエル・カマーチョ——メキシコ大学院大学

国際関係センター教授

本研究会の活動は昭和五十六年度
学際研究助成金の支給を受けた